

## 新潟県中越地震における長岡市応急仮設住宅の 使用実態と居住者の評価 —仮設住宅に関する研究 その1—

正会員 ○ 野村由香利\*1  
正会員 久木 章江\*2  
正会員 石川 孝重\*3

新潟県中越地震 応急仮設住宅 長岡市  
植栽 増改築 防災

### § 1 はじめに

2004年10月に発生した新潟県中越地震では、全壊2,821棟、大規模半壊2,011棟、半壊11,040棟と多くの住宅が被害をうけた。これに伴い、仮設住宅が数カ所に設置され、多くの被災者が暮らしている。

震災後の仮設住宅は、被災者が復興過程を過ごす重要な空間であるが、物理的・心理的問題も少なくない。

そこで仮設住宅の使われ方について、外観目視・ヒアリング・アンケート調査を実施し、現状分析を行った。

### § 2 調査方法

新潟県長岡市の操車場北仮設住宅223戸、操車場南仮設住宅236戸、悠久山仮設住宅162戸を対象に2005年7月から11月にかけて外観目視調査、ヒアリング調査、アンケート調査を行った。なお、外観目視調査は、比較のため、福岡県福岡市かもめ広場の仮設住宅についても同様に調査した。

外観目視調査は全戸数、ヒアリング調査は8名、アンケート調査は54件(操車場北38、悠久山16)である。

### § 3 外観目視調査およびヒアリング調査

長岡市の仮設住宅では、多くの住民が増築を行い、植栽を飾るなど、手を加えた使い方を行っている。そこで操車場北、操車場南、悠久山の仮設住宅を対象に、(1)物置スペースなどの増改築を行っているか、(2)植栽を育てているか、(3)玄関や窓などの開口部に視線を遮るものを設置しているか、に着目し、外観から目視調査を行った。

操車場北は4割、操車場南は7割、悠久山は6割の住民が大小規模の増築を行っている。なお、本調査では面積の大小、屋根の有無等にかかわらず、個人の所有する空間を広げた部分を「増築」と位置付けている。

増築事例を図1に示す。収納の不足を理由に大規模な倉庫を増築している例が少なくないことがわかる。また植栽については3割前後、玄関部分の視線を遮るものの設置も3割弱という実行度であった。

植栽事例を図2に示す。規模や飾る場所、飾り方などは様々である。なおこれらは以前の家から持参したものが大部分であり、日常に戻る過程の一端を担っている。

その他の事例を図3に示す。通常の庭のような大きな緑化空間を作り上げた住民や、既製品の玄関に満足できず、自分で付けなおした事例もあった。また住棟間の中央にプランターを置いて、敷地の境界を作りつつ、緑を共有するといった住まい方もみられた。



物置小屋

自転車置場の増設

玄関部分の増築

図1 増築事例(長岡市)



大規模な植栽

雑壇状の植栽

窓辺の植栽

図2 植栽の事例(長岡市)



休憩スペースの設置例

ドアの変更例

棟の間にあるプランター

図3 様々な工夫の事例(長岡市)



日差しと照り返しを遮る例

壁面緑化の事例

図4 緑化による温熱環境の工夫(福岡市)

ヒアリング調査の結果、増築に関するルールや規定は特に定められておらず、住民間で了承が得られれば問題なく増築可能という状況である。なお大空間を作った住民は、近所の住民と空間を共有し、植栽の近くにベンチを設置して語らいの場を共有するなど、コミュニティーづくりの一端を担っている事例も少なくない。

福岡県西方沖地震による福岡市の仮設住宅について同様に調査した結果、増築例はなく、緑化事例が多い点特徴であり、長岡市と異なる傾向になっている。(図4)。

## § 4 アンケート調査

次に、仮設住宅の満足度、入居後にどの程度手を加えたのかの実状と、増築や植栽に対する意見等に関するアンケート調査を実施した。全住戸の約半数である 150 戸に配布し、54 戸から回答を得た。調査時期は地震後約 1 年の 2005 年 11 月である。

仮設住宅の入居後に室内及び屋外に居住者自身によって何か手を加えたか否かについて質問した結果を図 5 に示す。

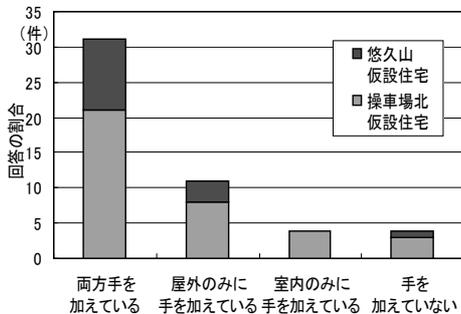


図 5 入居後に手を加えたか否か

半数以上の人には両方に手を加えたと回答し、自分の家らしく変化させていた。なお、被害状況（全壊・大規模半壊、半壊のいずれか）との関係を調査した結果、被害が大きい被災者の方が、仮設住宅の室内、屋外ともに手を加える傾向が高い。特に全壊の場合は仮設住宅に運ぶ荷物が半壊の居住者よりも多く、荷物の保管場所として増築せざるを得ない状況もある。

次に仮設住宅居住者の考える理想の仮設住宅を 1 の満足度とした時に、現在の仮設住宅の満足度がどの程度であるか質問した結果を図 6 に示す。

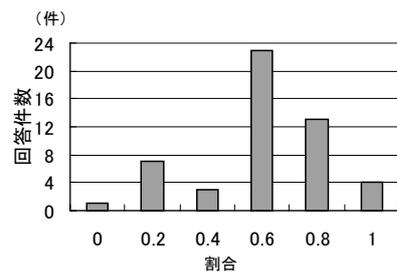


図 6 理想の仮設住宅を 1 とした時の現在の仮設住宅の満足度

現在の仮設住宅は理想の約 6 割程度という回答が多い。

さらに、仮設住宅だけでなく、周辺環境、インテリア、植栽等についても震災前の家と比較した満足度の結果を図 7～9 に示す。

全体の傾向を比較すると、「周辺環境>インテリア>植栽」の順に満足度が高い。外観調査では植栽に熱心な居住者がみられたが、被災する前の家で植栽に手をかけていた居住者にとっては現状の満足度は低い結果となった。

一方、周辺環境は、震災前と比較的に近くに仮設住宅が建設されたことや、町内会単位での入居となったために震災前の環境と近い点などが評価されていた。

また仮設住宅に自分の家らしさを感じている人は、室内に手を加えている率が高い。一方、「物があふりすぎて何かを飾ったりする空間的余裕がない」といった不満も多く、全体的には空間の狭さを不満に思う住民が多い。

なお、玄関部分を増築したきっかけは「雨や雪の吹き込みがひどかった」「断熱性を高めるために工夫した」など、当初の仮設住宅に対する不満を自らの手で解消したという経緯も多くみられた。

さらに「植栽に手をかけていると近所の居住者から話しかけられるようになった。」といった回答も多く、新しいコミュニティーが生まれていた。そのため、「入居してから出来た新しい友人と離れたくない。新しい家が完成したが引っ越したくない。」などの回答もみられた。

現状での問題点としては、「隣人の足音や振動が気になって眠れない」といった音環境に対する不満が多く挙げられ、仮設住宅の床性能の向上が期待されている。

## § 5 おわりに

本報は長岡市の仮設住宅を中心に外観目視・ヒアリング・アンケート調査を行い、使われ方の実状と住民の評価を整理した。収納不足や住環境改善のために自ら何らかの手を加えている居住者が多く、その一部にはコミュニティー形成を促進させる効果のあるものも存在している。

また、植栽やインテリアの工夫により、以前の住環境に近い状態を作り出そうとする傾向がみられ、日常生活の回復にむけた住環境の改善の実状がわかった。

なお、本調査にご協力頂いた皆様に心より深謝する。また調査の実施には中村圭江氏（元文化女子大学学生）の協力を得た。ここに深謝する次第である。

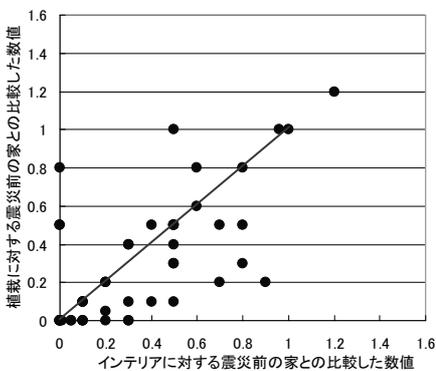


図 7 植栽とインテリアの満足度評価

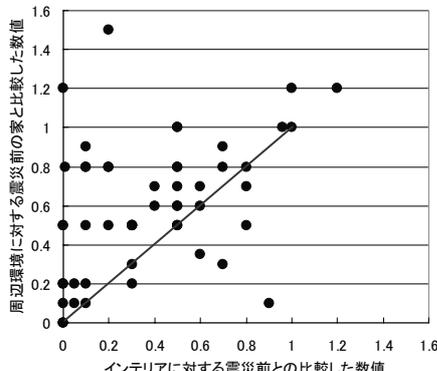


図 8 周辺環境とインテリアの満足度評価

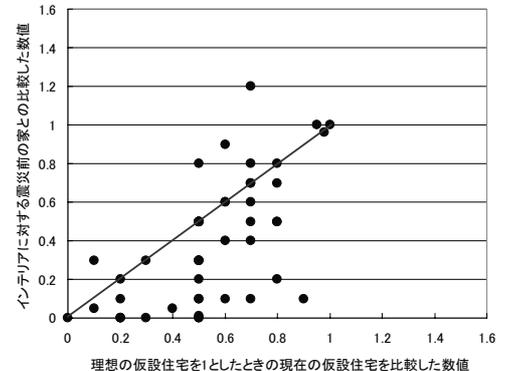


図 9 インテリアと仮設住宅の満足度評価

\*1 文化女子大学住環境学科 副手  
\*2 文化女子大学住環境学科 助教授・博士（学術）  
\*3 日本女子大学住居学科 教授・工学博士

\*1 Assistant, Dept. of Dwelling Environment, Bunka Women's Univ.  
\*2 Assoc. Prof., Dept. of Dwelling Environment, Bunka Women's Univ., Ph.D.  
\*3 Prof., Dept. of Housing and Architecture, Japan Women's Univ., Dr. Eng.